

# 国立 名古屋大学

プログラムの名称：潜在的支援力を結集した支援メッシュの構築

-- 総合大学における学生の多様な「停滞」への対応のために

プログラム担当者：学生相談総合センター長 鈴木 國文

キーワード

- 1．支援メッシュ 2．潜在的支援力 3．入口・出口・停滞  
4．学生が学生を支えるしくみ 5．文化的活動

## 1．大学の概要

### (1) 学生支援に対する理念や目標

名古屋大学は、大学学術憲章において「勇気ある知識人の育成」を理念としており、中期目標において、「学生の学習に対するサービスを充実し、その支援環境を整備するとともに、学生生活に対する援助・助言・指導の体制の充実を図る」ことを目標に掲げている。

名古屋大学には様々な学生支援体制があるが、その中心的なものの一つとして学生相談総合センターが位置づけられ、相談業務を通して学生生活への支援を推進している。センターでは、競争原理のみにとらわれない学生支援を第一の目標としている。

### (2) 学生支援と教育活動や研究活動との関連付けについて

名古屋大学では、高度な教育活動と研究活動を補完するものとして、全学共通基盤を整備してきた。その一環として、学生相談総合センターが創設され、大学の入口（入学）から出口（卒業）まで、個別の相談活動を中心とした学生支援を行ってきている。ここでは、一般の学生への支援に加えて、通常の大学教育から外れつつある学生への支援や、一時的に学業から離脱してしまった学生の、学生生活への復帰支援を行っている。

また、学生相談総合センターでは、学生支援の立場から教育に参画し、基礎セミナーや全学教育科目を担当している。これらは、全学を対象とした学生生活の支援活動となっている。

## 2．本プログラムの概要

本取組では、総合大学の豊富な知的・文化的・人的資源を学生支援の潜在的支援力と捉え、それらを結集して大学生生活の入口・出口・停滞をおおうきめ細やかな支援

の網を構築する。この体制を支援メッシュと定義する。

具体的には、学生が学生を支えるしくみや悩みを持つ学生同士が交流する場など、多様なグループ活動を学生と協働で運営し、これらを網目（メッシュ）のようにつなぐ。グループ活動では、従来のサークル活動とは異なり、専門家がオーガナイザーとして関わり、文化的活動を媒介として、学生同士のコミュニケーションの活性化を図る。活動は学生主体で運営されるが、教職員もこれを支え、学部横断的に展開する。この取組は、学生支援の専門家だけに委ねられるのではない、大学全体の支援力を高めることを目指すプログラムである。

## 3．本プログラムの趣旨・目的

### (1) 現在行われている取組について

学生相談総合センターの3部門は、専門性の高い個別相談を行い、学生支援の効果を上げている。相談内容に応じて、臨床心理士が対応する「学生相談部門」、精神科医が対応する「メンタルヘルス部門」、キャリアカウンセラーが対応する「就職相談部門」が、きめ細かいサービスを提供している。また兼任相談員として、法律学者、スポーツ心理学者、産婦人科医、多文化カウンセラー等を置き、多面的な視点から学生の多様な相談に応じる体制となっている。

学生相談総合センターでは、様々な連携が行われている。学生相談の取組の中心は3部門における個別相談である。個別相談においては、学生のプライバシーに配慮しつつ、必要に応じて各部局の教職員と連携をとっている。さらに相談内容によっては、留学生センター、セクシュアル・ハラスメント相談所、保健管理室、学務部学生総合支援課等と密接な連携を行っている（図1参照）。

学生相談総合センターでは、個別相談以外の場面でも、例えば「1・2年次生の適応援助のための連絡会」を開催し、低年次学生の指導教員との連携体制の構築

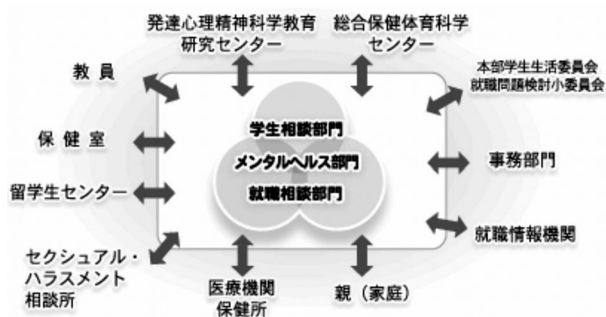


図1 学内他機関との連携図

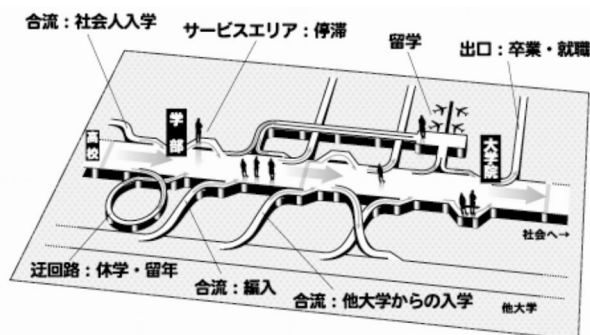


図2 多様な学生のイメージ図

表1 多様な学部学生在籍状況推移

	平成16年度入学者	平成17年度入学者	平成18年度入学者	平成19年度入学者
社会人	1	2	3	0
帰国子女	3	3	3	6
3年次編入	92	89	90	95
2年次編入	—	—	—	3
外国人留学生	28	25	32	32
障害者	3	1	1	5
3浪以上の入学者	23	47	22	20
合計	150	167	151	161

を図っている。

学外の関係機関との連携は、個別相談の必要に応じて行われる場合と、学生支援の研究・研修として行われる場合がある。個別相談においては、センターで対応できない事例（自殺企図や急性精神病状態など入院など必要とする事例）を、学外の医療機関に紹介する等の連携を行っている。

(2) 社会的ニーズや学生のニーズへの対応の現状について

(i) 学生支援に関する社会的ニーズと、ニーズへの対応

学生支援に関する社会的ニーズとしては、まず、学生の多様化と、その対応の難しさがあげられる。学生の学力、勉学意欲、関心は多様化してきている。また、社会人学生、編入学生、留学生が増加し、年齢、経歴、文化的背景が多様化してきている（表1参照）。このような学生の大学への適応を支えることが大きな社会的ニーズとしてある。

また近年、学生が未熟化し、対人関係の希薄な学生、孤立する学生が増加している。また、入学（入口）と卒業（出口）の間で、様々な形で「停滞」する学生が増加してきている。これは、社会全体の傾向を反映した問題であり、看過できない深刻な事態である（図2参照）。

その中核をなしている問題として、「社会的ひきこもり」及びその周辺の不適応問題がある。「社会的ひきこもり」とは、6カ月以上自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、他の精神障害が第一の原因とは考えにくいものである。大学生では、不登校や長期留年、さらには退学という事態へと至る場合がある。こうした「停滞」の学生に対して、学生相談総合センターでは、個々の学生及びその家族との面接を行って対応している。

青年期にいる大学生は、「社会的ひきこもり」だけでなく、うつ病や精神病、対人恐怖、さらには家族関係、友人関係、その他様々な心理的問題を抱えている場合も多く、その対応は、相談内容に応じる形で各部門が行っている。

このように、現在、個々の学生に対しては、支援の可能性が開かれているが、必ずしも十分な成果が上がっているとは言えない部分がある（表2参照）。また、学部・研究科等との連携体制は未だ完全であるとは言えない部分があり、全学的な視点での支援体制の構築が、今後の課題である。心理的・精神的問題やキャリア形成に関わる問題で、学生生活の半ばで停滞が引き起こされる学生は一定数存在しており、このような学生に対する対応方法の改善は、大いに望まれるところである。

(ii) 学生のニーズを把握する方法

学生のニーズの把握は、学生支援に関連するいくつかの部署で行われている。学生生活委員会では、隔年に「学生生活状況調査」を行い、学生全体の生活の実

表2 不登校実態調査に見る不登校者数

文	1
教育	0
法	5
経済	9
情報文化	7
理	21
医 医学	0
医 保健	8
工	62
農	0
学部全体	113

態を調査している。

学部においては、不登校者の実態、学生の異動状況（除籍、退学者、休学者）についての調査を実施し、不登校やひきこもりの実態を把握しようとしている。

学生相談総合センターでは、毎年、入学時に学生生活に関するアンケートを行い、入学直後の学生の意識を調査している。また、相談で対応した学生の、相談内容・相談件数の推移を毎年集計し、学生が抱える問題の把握に努めている（例えば、メンタルヘルス部門の内訳では、広い意味での「ひきこもり」は、新規相談件数の約31%を占めている）。また、保健管理室では、定期健康診断時の精神健康調査で、精神的問題についての質問紙を実施し、問題を抱えた学生に対して面接を行っている。

これらの調査からは、学生本人だけでなく、指導教員、家族等からの、相談へのニーズが年々高まっていることが把握されている。しかし、専門機関であるセンターを気軽に利用できない学生も多く、ニーズのある学生のすべてに対応できているとは言えない状況がある。

### (3) 動機と背景

大規模で部局間の独立性の高い総合大学では、学生支援の窓口が細分化・専門化され、あるいは逆に総合化され、かえってそこからこぼれ落ちる学生が多い。加えて近年は、留学生、社会人、編入生、他大学経由の入学者が増加しているため、彼ら特有の困難を支える支援策が追いついていない。そこで、多様な学生に配慮しつつも彼らを細分化するのではなく、かつ大規模な一律の施策でもない、きめ細やかでありつつ大学全体をおおうような、全く新しい発想の学生支援のあり方が必要となる。

### (4) 趣旨と目的

ここで構築する支援体制をメッシュと定義する。比較的小規模な学生支援の場（グループ活動）を様々に設定し、これらが連携しながら、大学への入口から出口まで、その途上で起こる停滞も含めておおう。この取組では、学生生活につまずいた学生が、他の学生や教職員と出会うことでひとつのメッシュ（網目）が結ばれ、それがつながってピア・サポートなど小さな支援の網となる。さらにこの小さな網が1つの網目となって他の小さな網とつながり、大学全体をおおう大きな支援の網となる。メッシュをたどることにより、多様な道筋を通して大学の出口へ、社会へ向かって行く

ことができる（図3参照）。

グループ活動は、多様な学生を生かし、彼ら自身が交流しながら支え合う場とする。本学ではすでに学生が学生を支えるしくみとして入口にピア・サポート、出口に就活サポーター、留学生など多様な学生の交流の場として多文化ディスカッショングループがあり、

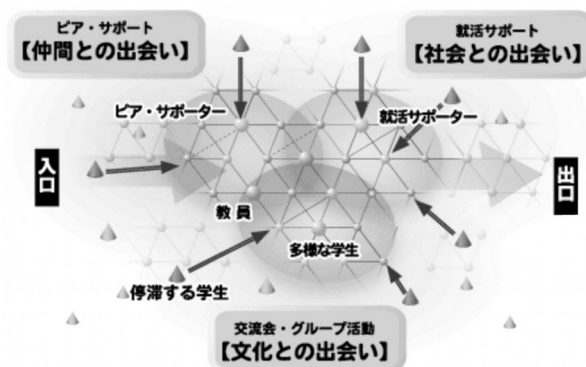


図3 支援メッシュの概念図

表3 ピア・サポート活動、就活サポート活動の概要

活動名	名大ピア・サポート
活動目的	1. 新入生を中心とする学生が名大の知的資源や人的資源を十分活用し、不安なく充実した学生生活を送ることができるようサポートすること、2. 活動を通じ、学生同士がお互いに助け合う雰囲気をつくり、良き名大生のアイデンティティを形成すること 3. ピアサポーター自身の成長
活動内容	1. 2名1組体制で3ペアのピアサポーターが常駐し、来室する相談者に対応 2. 4月に「フレッシュマン応援デー」を設置し、入学間もない新入生に対応
設立	平成16年4月
活動期間	4月中旬～7月中旬 10月初旬～12月初旬
活動日	毎週水曜日 13時～16時
活動場所	ピア・サポート・ルーム
活動メンバー	理系・文系の学部生から大学院生まで
活動資格	ピア・サポート活動に関心を持ち、4日間の養成講座に参加し訓練を受けた学生
人数	11名のピアサポーターと3名のピア・アドバイザー
対応相談件数	27件
教育担当・支援部門	学生相談総合センター学生相談部門
活動名	就活サポーター
活動目的	1. 就職活動を終えた学生が、これから就職活動を行う学生に対し、自身の経験や就職活動に関する情報を提供することを通じて、就職活動生の役にたつ、応援していくこと 2. 活動を通じ、さまざまな人との思いを共有し、ともに行動することで、社会人になるための準備、サポーター自身成長を遂げること
活動内容	1. 2名1組体制で就活サポーターが常駐し、来室する相談者に対応 2. 学内企業研究セミナーにてコーナーを設置し「出張シュウサポ」を実施
設立	平成14年9月
活動期間	10月初旬～翌2月中旬
活動日	毎週月～金 13時～17時
活動場所	学務部学生総合支援課就職支援室
活動メンバー	進路決定した学部4年生および修士2年（文・理）
活動資格	就活サポート活動に関心を持ち、半日の事前研修に参加し訓練を受けた学生
人数	47名
対応相談件数	200件
教育担当・支援部門	学生相談総合センター就職相談部門 学務部学生総合支援課就職支援室

## 事例14 名古屋大学

成果を上げてきた（表3参照）。しかし、入口、出口もまだ不十分であるうえ、停滞する学生を支える場はなかった。

そこで、本プログラムでは、グループ活動（学生が学生を支えるしくみ、学生同士が交流し支え合う場）を強化する。具体的には、入口には学修サポート、出口には同窓会を活用した社会体験グループ、停滞する学生に対しては多様な学生が交わりながら活力を取り戻すためのグループ活動を、学生と協働で新たに組織し、運営する。ここでの停滞は、精神病やパニックなど重篤なものだけではなく、健康な学生でも起こり得るものを想定する。

特に停滞する学生のためのグループ活動では、従来のサークル活動とは異なり、心理学・精神医学の専門家がオーガナイザーとして関わり（「各年度の運用」参照）文化的活動を媒介として、学生同士のコミュニケーションの活性化を図ることを目指す。運営は、専門オーガナイザーのもとで募集に応じて集まった学生主体で行われ、その中には一般の学生だけではなく、多様な学生、つまり編入生、留学生、あるいは停滞している学生自身も含んで、学生の潜在的支援力を引き出す。例えば、文化的な媒介としてインターネットを取り上げ、情報科学を専門とする教員をファシリテーターとして迎え、「インターネットと学生生活について語り合う会」を企画実施し、教員と学生、学生同士が部局を越えたつながりを持てるようにする。活動の場としては、大学の重要な文化資源である博物館、図書館などの施設を活用する。

このようにグループ活動とそれらの連携は、入口、出口、停滞のそれぞれについて学生相談総合センターの3部門と専門オーガナイザー2名が拠点となって推進される。授業、FD、SDを通して、これらの活動に

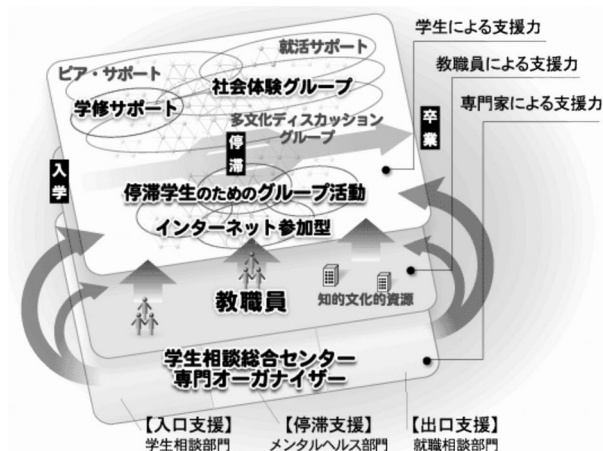


図4 支援メッシュの全体図

ついて関連の教職員と情報交換を行って活動間の連携を図る。これによって、多様な学生支援の場がつながり、大学全体をおおうきめ細やかなセーフティネットが構築される（図4参照）。

しかし、このような活動の場にも、自ら足を運ぶことを躊躇する学生が存在することが予測される。そこで、交流室の活動の一環として、インターネットを有効利用した仮想空間の交流室を並行して設けることを計画している。

### (5) 大学における意義

大学における最大の意義は、大学の持つ知的・文化的資源と学生支援をつなぐことである。これらの資源はこれまで研究・教育には生かされてきたが、学生支援に生かされることはなかった。この取組は、学生支援の専門家が学生や教職員と連携しながら学生支援を行うので、大学の支援力を高めることに貢献する。

## 4. 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

### (1) 新しい発想や独自の創意工夫

以下の3つを挙げることができる。

第1に、メッシュ（網目）という発想を持ち込み、大規模な支援策ではこぼれ落ちがちな総合大学の学生を、「大きな網」ではなく「小さな網」で支援する点である。小さな網を大学の入口から出口まで重ねることにより、これまでは専門家による個別相談の場ではできなかった、個々の学生を入学から卒業までフォローをする場が増える。

第2に、学生が学生を支えるしくみにより、支えられる学生のみならず支える学生を活性化させる点である。近年、サークル活動の衰退等による学生の対人関係が希薄化しているが、この取組によって学部を越えた学生間の交流が生まれ、学生同士が互いに支え合う風土を生む。

第3に、グループ活動の媒介として文化的活動を取り入れる点である。この工夫は、総合大学だからこそ可能であり、学生、教職員、文化施設という大学の文化的潜在力を結集するという発想は、他に例を見ない。

### (2) 他大学の参考となるか

これらの発想は、きめ細やかな支援が難しいと考えられてきた大規模な総合大学にとって大いに参考になると考える。また、近年多くの大学でピア・サポート等の学生が学生を支えるしくみが施行されているが、

学生だけで運営していたり、相互の連携の乏しい場合が多い。この取組は、それをどのようにさらに効果的に運営し、大学全体の学生支援の資源としていくかの先駆的な模範となるだろう。さらに、文化という視点は、近年の大学の急激な変化による様々な困難を補完し、高等教育機関らしい形で学生の人格的・知的発達を支える方法を示唆すると考える。

## 5. 本プログラムの有効性（効果）

### （1）期待される効果

この取組により、これまで学生相談総合センターによっても十分アプローチできなかった停滞学生、とりわけ個別相談の場に現れない学生に対して、文化的活動やインターネットを取り入れることで関係性を構築し、継続的にフォローすることが期待できる。また、学生同士が支え合うことで、高校から大学、大学から社会、停滞から復学への移行をスムーズにすることができる。

### （2）現在の取組との相乗効果

これまで本学で別個に行われてきた学生支援策をメッシュの発想でつなぐことで、学生にとっては、学生生活のどの時期に、どのような困った事態に陥ったら、どこに行けばよいのかが分かりやすいくみができる。どの窓口からでも支援につなげていくことが可能となる。また、学生相談総合センターの個別相談に、学生が学生を支えるしくみ、教職員による支援をつなぐことで、大学全体をカバーするきめ細やかな多層のセーフティネットが構築される。さらに、学生相談総合センター3部門はこれまで緊密に連携してきたが、この取組を通して各部門が入口、出口、停滞のそれぞれを担うことで、関連する他部局との連携が効率的に行われるようになる。

### （3）社会的ニーズ・学生ニーズとの対応

この取組は、増加する未熟な学生に対してコミュニケーションなどの社会体験を練習する場を提供する。また、多様な学生を大学の財産と捉え、彼らが一同に会して刺激し合う場を提供する。さらに、学生は一般に専門家による個別相談は敷居が高いと感じるので、専門家ではない気軽な相談の場を提供する。

### （4）教育活動・研究活動との関連性

総合大学の教育・研究は部局間の自律性が高い。そ

れに対してこの学生支援プログラムは部局横断的に展開される。両者が補完し合って、総合大学としての活力が高まることが期待される。

## 6. 本プログラムの改善・評価

### （1）評価の体制・方法

学内的には、学生相談総合センター運営委員会、総長がイニシアティブをとる全学的組織によるチェックを、学外的には、外部評価（学生相談、留学生支援の専門家等による）、シンポジウムの開催、報告書の作成を行う。

### （2）評価の観点

学生及び教職員によるグループ活動が、専門家だけによる支援と比べて何が異なりどんなメリットがあるのかを質的に評価する。

### （3）評価結果の活用

3つの活用を考えている。第1に、報告書やシンポジウムを通して全国の大学に知らせる。第2に、学生が学生を支えることによって、学生のニーズがよく見えるようになるので、それらをプログラムの改善に生かす。第3に、学生支援の方法は学問的に体系化されていないので、体系化した知恵にしていく。これまで専門的支援についての学問はあったが（心理療法、精神医学）、専門的支援と一般学生をつなぐ方策については学問化されていない。その第一歩とする。

## 7. 本プログラムの実施計画・将来性

### （1）各年度の運用

2007（平成19）年度

既存の活動の充実とプログラム施行の体制づくりを行う。

#### ・専門オーガナイザー2名の雇用

学生相談総合センター教員は学生の個別相談に対応するため、グループ活動をオーガナイズする心理学・精神医学の専門家が必要である。本学にはこの専門家が欠けているため、新たに雇用する。入口（学修サポート）・出口（社会体験グループ）担当者1名、停滞（「本について語り合う会」「インターネット参加型グループ」などのグループ活動）担当者1名を計画している。着任後は、部局等で行われている既存の活動の現状把握、運営する学生サポーターの募集、広報活動、

## 事例14 名古屋大学

教養教育院や指導教員との連携など、本取組における様々なグループ活動の企画運営と全体の統轄に必要な業務を遂行する。

- ・インターネット参加型グループのためのシステム開発
- ・既存の活動の充実（ピアサポーター、就活サポーター交流シンポジウム、活動報告書等）
- ・国内外の先駆的取組視察、資料収集
- ・関連部局間の連携確保

2008（平成20）年度

新たなグループ活動を立ち上げる。

- ・新しいグループ活動の立ち上げ（学修サポート、社会体験グループ、停滞学生のためのグループ）
- ・インターネット参加型グループの準備（翌年度開始）
- ・学生に対する広報活動開始

2009（平成21）年度

グループ活動の運営と実施報告を行う。

- ・シンポジウム開催  
「1・2年次生の適応援助のための連絡会」（FD）  
「事務職員との交流会」（SD）で成果を報告し、教職員の学生支援のスキルアップを図る。

2010（平成22）年度

成果の評価を行い今後の課題を整理する。

- ・外部評価の実施、報告書作成

### （2）組織性の確保

学生相談総合センター、関連部局、専門オーガナイザーにより、2007（平成19）年度に準備委員会を設立し、2008（平成20）年度からはこの委員会が運営に当たる。

### （3）人的・物的・財政的条件の整備

グループ活動を企画実施するオーガナイザー2名は、心理学・精神医学の専門家で、グループワークや集団精神療法の実践・研究の経験のある者とする。プログラム準備室、運営室については学内に場所を確保する。

### （4）期間終了後の展開

シンポジウムによる中間評価、外部評価の結果を経て効果を把握し、それをもとに継続する活動と縮小・改善する活動を整理し、メッシュ型支援をより効率的に継続する。また、そのためには専門オーガナイザーのうち少なくとも1名は継続的雇用を確保したいと考えている。さらに、入口・出口・停滞に対応する多様なグループ活動を継続し、大学全体の支援力の向上を図る。

## 選 定 理 由

名古屋大学においては、現在の学生支援は基本的な形としてはよく整えられており、多方面にわたって地道な努力がなされ、着実な成果を上げていると言えます。他方で、必ずしも十分でない点に関して、問題点の把握・明確化を通じてそれに的確に対処する堅実な姿勢が見て取れます。

また、今回申請のあった「潜在的支援力を結集した支援メッシュの構築」の取組は、現状の問題点を踏まえたものとして明確に位置づけられており、大学の有する知的・文化的・人的なリソースを活用して、文化的活動を内容とする学生主体の種々のグループ活動を立ち上げ、それに心理学・精神医学の専門家がオーガナイザーとして関与し、また、教職員も関わる形を取りつつ、それらのグループ活動をつないできめ細かな全学的なメッシュを構築していくことによって、特に不登校学生等の停滞学生への対処を念頭に置きながら、学生の入口から出口までの円滑化・豊潤化と問題解決を図ろうとするものであり、堅実で独自の発想に基づいたものであると言えます。

評価・改善方法、実施計画・将来性に関してもよく考えられており、社会的ニーズ・学生のニーズに応えるものでもあり、特に停滞学生の問題は一般性があり、他の大学等にとっても参考となる優れた取組であると言えます。